

令和元年度 読書感想文コンクール 入賞者紹介～中学生・高校生～

		最優秀賞	優秀賞	佳作
中 学 校	1年	目黒好香 「手足のないチアリーダー」 を読んで	渡邊智貴 「君たちはどう生きるか」 を読んで	伊藤 翠 「犬の消えた日」 を読んで
	2年	石森咲貴 「顔で笑って、心で泣いて」 を読んで	佐々木 亜椰花 「想像ラジオ」を読んで	大澤 拓人 「下町ロケット」を読んで
	3年	上葛日和 「16歳の語り部」 を読んで	内藤 佳菜絵 「余命10年」を読んで	佐藤 駿 「鼻」を読んで
高 校		神原朱里(3年) 「もものかんづめ」 を読んで	目黒千晴(2年) 「生きづらさを抱える きみへ」を読んで	近藤匡哉(1年) 「ロストボーイ」を読んで



「手足のない
チアリーダー」
を読んで

月形中学校1年
目黒好香

どうして有美さんはこんなに強いのだろう。この本を読み終えて、一番にそう思った。どうしてそんなに笑えるのだろう。この本を開いて、一番にそう思った。有美さんは、手足がなく、周りの人に「何で?」「どうして?」と聞かれても、このやりとりが皆と仲良くなる最初の関門なんだと、一度も悲しい辛いと思わずにいた。それに、本にある写真に映る有美さんは、笑っ

ている。一つも泣いている写真はない。きつと有美さんは、どんなことがあっても笑顔で乗り切れる心の強い人なんだと思う。

私は佐野由美さんの『手足のないチアリーダー』を読んで、どんなに身体が弱く重い障がいをもった人でも、心は強いんだろうということを知った。私は今、何不自由なく暮らしているが、障がいをもった私と同じ子どもはどうだろうか。

有美さんは生まれつき手足がない。四肢欠損の子どものなかでも重いほうだ。手は腕ごとなく、右足もほとんどない。左足は足とよぶには短すぎ、指が三本あるだけ。有美さんの母はこの現実を受け入れられず死を考えるほど自分で自分を追い詰めていたそう

だ。私は、この本を読んで自分の過去を振り返ってみた。有美さんは、手足がなくてもあきらめず前に進もうとしていた。だから、誰になんと言われてもくじけずに笑っていた。それに比べて私はどうだろうか。私には手も足もある

し、自分一人で食べることも着替えることもお風呂に入ることも何だつて出来る。なのに、「イヤだ」と途中で投げ出したり、「もう無理だ」と途中であきらめたりすることがあった。例えば、クラスでバスケの試合をしているとき、私のチームが負けていて残り時間も少ない、みんな焦ってなかなかシュートが決まらない、私は「もう、私のチームに勝ち目はない」とあきらめてしまっていた。きつと、こんな時有美さんなら、最後まであきらめず戦い続けると思う。たとえ無理だと分かっていても。だから私は、「勝てない」と思うのではなく「負けたくない」と思うようにしたい。最後まであきらめずに戦い続けていきたい。

「辛いときがあるからこそ幸せがやってくる。泣けば泣くほど笑顔になれる。そうやって歩いていこう。」これは、有美さんの言葉だ。私は「涙が出てくるのは弱いからではなくて長く強がりすぎだから」と、「どんなに辛いことがあっても笑える人こそが本当に強い人」という有美さ

んのあの言葉を見た瞬間、頭をよぎった。そのときに私はこう思った。「有美さんは自分に正直に、自分を信じて生きていくんだ」と。

「辛いに一たすと幸せになる」という言葉があるように、辛いのは幸せになる途中なのかもしれない。それに、辛いのをがまんしたり涙をがまんしたりするとなかなか笑顔になれない。だから、がまんせずに泣くと早く笑顔になれる。これを忘れずに生きていこう。有美さんはこんなことを伝えたいんだと思う。泣きたいときに泣き、辛いときは辛いと言う。私も、何でも一人でかかえこまずに、誰かに相談しようと思う。「私は特別ななんかじゃない。ふつうの女の子です。」これは、本を開くとあるあらすじの一部だ。私は、図書館で本を選んでいるときにこの本に出会った。そのときに、この言葉を見つけて、すぐこの本を借りた。

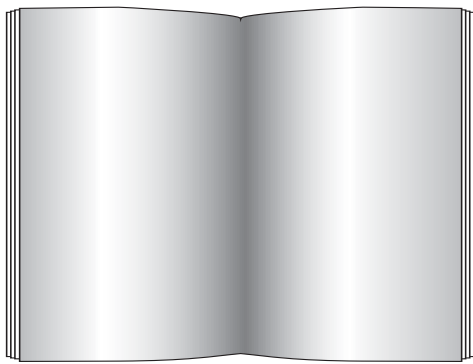
かぎらないけれど、私はあの子に、「普通の女の子」として見ていたか、接していたかと聞かれたら、答えるのをためらうと思う。正直、小学生のころのことはよく覚えていない。だが、これは都合の良い言い訳だ。でも、私だけではないと思う。きつと他の人もそうだと思う。だから私は、相手がどんな人だろうと、みんなと同じように平等に接していきたい。有美さんも、みんなにそうしてほしいと願っていたはずだ。

私がこの本を読んで学んだこと、それは障がい者を差別しないということ。差別はよくないことと分かってはいたが、それは「何となく」だった。だが、この本を読んで今まで以上に理解を深めることができた。私は、障がいをもった人の気持ちは分からないけれど、障がい者の人にとって特別扱いや同情はイヤだと思う。だから、何事もなかったかのように振る舞ってあげたい。きつと、それが本当の優しさであり、思いやりでもあると思う。

二つ目に学んだことは、壁

にぶつかってもそれに負けない心が大切だということ。私はその壁が、自分の一つの目標になると思う。きつとその壁をこえると、達成感を得ることが出来ると思う。つまりいたり転んだり、色々あると思うが、前に進むことをやめないようにしたい。前に進み続けていきたい。

人生に行き詰っても、笑顔で前をむける「心の強い人」に私はなりたい。



「顔で笑って、
心で泣いて」
を読んで

月形中学校2年

石森 咲貴

私は、この本に引きつけられました。たくさんある本の中で、なぜかこの本が目にとまったのです。この本は、梅沢富美男さんが書かれた本です。手にとってから、「梅沢さんは、この本にどんなことを、どんな思いで書いたのだろう」と思い、この本に決めました。

梅沢富美男さんの本なので、最初から最後まで自分が体験されてきたことが書かれているのかな、と思ったけれど、違いました。梅沢さんの母・千子さんのことや、父・清さんのことから書かれました。千子さんは、幼い頃からたくさん苦労があったそうです。父親が蒸発し、自分で稼がなければという思いから、大好きだった踊りの道に進むことを決めます。家族から大反対されますが、娘歌舞伎の竹沢一座に入ります。千子さんは、母から「この家から勘当されるも同じ」と言われたそうです。私は、千子さんのように、親にそんなことを言われてもやりたい！と言い切れることがすぐには思いつきませんが、なので、そ

んなに熱中できることがあるのは、少しうらやましいです。千子さんは一座の座長である竹沢龍造さんから、『竹沢龍千代』という芸名をもらいます。馬車での事故で負傷者が出て、たった15日で娘歌舞伎の舞台に立つことになったので、この名前がつけられました。新人である龍千代が先輩方の役をやり続けることになった、というので、たくさん意地悪をされたそうです。その当時のことを、「今となれば、あどきに姉さん達に意地悪されてよかったんだよ」と振り返っていたそうです。みなさんならどうですか？龍千代さんのように強くいられるでしょうか。私は、よく親から打たれ弱いから心配だ、と言われます。自分でもその自覚はあります。なので、すぐに折れてしまうと思います。そして私は、「最大のライバルは自分自身」と思える梅沢富美男さん、龍千代さんのことがとてもかっこいいと思いました。

龍千代さんは、24歳の頃、剣劇一座の座長であり花形、市川梅三郎さんとお見合

いをし、結婚します。後に、富美男さんの父となる人です。しかし、梅三郎さんは入籍したその日に、赤紙が来て戦地へと向かうことになりました。それから約一年半後、戦地から帰ってきて、龍千代さんは竹沢一座を辞め、市川梅三郎一座に嫁ぎます。ここでも、たくさんの苦労があったそうです。夫に、「そろそろ舞台に立ってみないか」と言われ、喜びの気持ちを抱き、稽古に参加します。しかし、龍千代さんは「台詞」というものに苦戦します。これまでやってきた娘歌舞伎では、台詞は必要ないものだからです。大きい声が出ず、お客さんからヤジが飛ぶこともあったそうです。ここでは素人同然なんだ…と感じることは、とても辛いことなんだと思います。今までやってきたこと、できていたことがここでは通用しない、というのは、私はまだ経験したことがありません。ですが、これからは先、経験することがあると思います。その時は、これまでに何か一つでも、自分のためになることを探して

分のためになることを探して

みたいです。きっと、何かあると思うからです。龍千代さんは、夫である梅三郎さんには負けられない！という思いがあったから、その後も続けることができたそうです。悔しさというのは、人を成長させてくれることを、改めて感じました。私は今年の吹奏楽コンクールで同じようなことを体験しました。今年も、とても自信がありました。一年生だった昨年よりも、上手になっっている自信がありました。ですが、いざステージに出ると、今までできていたはずのことができなくなってしまうました。大勢の人の前と、緊張もあつたかもしれません。ですが私は、自分に負けたような気がしました。心のどこかで、「できない」と決めつけていた自分に負けました。私はとても悔しかったです。その日から、上手くなりたいたいという気持ちが大きくなりました。でも、吹奏楽はみんなが気持ちを一つにするものなので、楽しむことは忘れないようにしています。

私がこの本の中で、一番印象に残ったのは、余命がわず

かになった龍千代さんが富美男さんに言った「おまえを生んでよかった」という一言です。心に、ぐっとくるものがありました。私は一人の子どもとして、両親にそんなことを言ってもらえることを想像すると、嬉しいなんて富美男さんも、そんな気持ちだったのではないかと思います。

今回、この本を読んで、この本に出合えてよかったです。『顔で笑って、心で泣いて。』という題名と共に、表紙には「忘れられない母のことば」と書かれています。これは、梅沢富美男さんの母への愛や、感謝の気持ちなど、たくさんの感情が込められているように私は感じました。テレビで見る、「梅沢富美男」の印象がこれから違うように見える気がして、何だか楽しみにしている自分がいます。



「16歳の語り部」

を読んで

月形中学校3年

上葛 日和

荒れ狂い、次々と命を飲みこむ黒い津波。波に向かつて叫び絶^{すが}える人々。2011年3月11日、後に「未曾有の大震災」と呼ばれるこの震災の凄惨さを、私はテレビ越しに眺めているだけだったことを最近思い出した。

先日私は、姉が参加する東北物産販売会に行った。この本を手取るきっかけは、会場にあった震災後の東北の姿を収めた動画や写真だった。私はそこにある現状にショッ

クを受け、それらにまともな目を向けられなかったのだ。けれど8年以上のときを経て、風化しつつある東日本大震災を忘れないでほしいと願う人がいるからこそ、姉たちはこのような活動をしているのだ。そこから目をそらしては意味がない。その想いを受け止めたい。私なりに少し勇気を出して、この本を読んだ。

東日本大震災から5年、震災の語り部として活動する被災地の3人の高校生がいた。この本では、それぞれが体験した「あの日」が如実に語られていた。

「大人が僕の目の前で、黒い津波にさらわれていったのです。」
一人めは津波が人を食らう瞬間を目前にした那由他さん。食われる人の中には那由他さんに手を伸ばす人もいたそう。小学生にして生死の境地に立たされるのはあまりに過酷だ。幾らか年上の私でも、想像を試みるだけで身の毛がよだつ。時を経ても那由他さんの脳内を巡る「手を伸ばしてあげればあの人は助かったのではないか」という後悔。

同じ状況下なら私もそう思うだろうが、そこから何か行動を起こすにはきつと至らない。でも那由他さんは違った。伝えることで、これからの命を助けられる可能性を見出したのだ。そして「一日ひとつ、何でもいいから大切な人との思い出を作ってほしい」と訴える。そうすれば少なくとも、その人との別れの日が来た時の後悔だけはなくせる、と。那由他さんの語りは、全てがすつと腑に落ちるものだった。

「感謝なんかしてないのにどうしてありがとうとか書かなきゃいけないの。もう十分頑張ってるのに、これ以上頑張れない。」

二人めの穂乃果さんは励ましの手紙に返事を書くとき、いつもそう思っていたのだという。時によつては人の心を切り裂く刃に変貌する頑張れという言葉も、私も無神経に発していないだろうか、と胸に手を当てた場面でもあった。那由他さんと同様の理由で語り部を始めた穂乃果さんは、三人の中でも人一倍言葉に大事にしているように感じた。穂乃果さんは「人との生

の関りを大切にしたい」と語る。本当に伝えたいことはメールやLINEじゃ伝わらない。私もそう理解しているつもりでいたが、今一度言葉の重みを実感した。一番共感できる語りでもあった。

「津波が、私の大切にしてきたものを全部持っていったのです。」
三人めの朱音さんは、震災の前日に親友と喧嘩したまま別れ、その親友を津波で亡くした。朱音さんは現実逃避を続け「自分なんか生きてる価値ない」と物事をネガティブに捉えるようになったという。この場面を読んで私が出たのは、朱音さんの計り知れない無念さを嘆くことだけ。そんな朱音さんも成長と共に心の整理をつけ、二人と同じく伝えるという手段を選んだ。親友の死を無駄にしないため、伝えることで自分を救うため。自分の心を立て直し、人の救いに繋げることは誰でも出来ることではないから、朱音さんのその姿勢に少しでも近づきたいと素直に感じた。三人の語りから得たことは数えきれない。

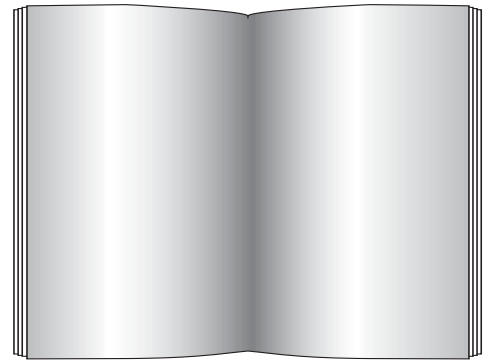
「風化させないでほしい。」
被災した方々が販売会の動画で、語り部が本の中で、口々に語っていたこの言葉。被災していない私たちは、震災を忘れても生活に変わりはない。だが被災した人々は生活を失ったままなのであって、明日は私たちが被災するかもしれない。失ってから「あの命は救えたはずの命だった」と言っても遅いのだ。悲

しみを二度と繰り返さないために、奪われた命を無駄にしないために、救える命を救うために、絶対に風化などさせない。こんな私でも力になれたいことを見つけてみせる。

より多くの人が三人の語り

READING BOOK





「もものかんづめ」
を読んで

月形高校3年
神原 朱里

昨年の8月15日、「ちびまる子ちゃん」の作者で有名なさくらももこさんが亡くなった。そのニュースを見て、私は「アニメしか知らないのでは」と読んでみたいと思った。後日、書店へ行き探してみると、ブラーッとさくらももこさんの本が並べてあった。私は何から読んだらよいかわからなかったため、表紙がかわいらしいと思った「もものかんづめ」を買った。この本はさくらももこさんの初エッセイ集で、ベストセラーとなっている。さくらももこさんの

経験がユーモアある言葉によって書かれている。

私がこの本を読んで印象に残ったところは主に二つある。一つ目は「宴会用の女」という章である。ここでは作者のOL時代の経験が書かれており、作者は上司に「宴会で面白そうだから採用した」と言われたり、作者が仕事中心居眠りをしてしまい、何かのはずみで変なボタンを押し、パソコンを壊したり、読んでいてハラハラした。二つ目は、「結婚することになった」という章である。ここでは結婚式の前の挨拶から結婚式までの様子が書かれている。この章の終盤、いつものんきでニヤニヤしている作者の父親ひろしが、娘の結婚式で泣いている場面があり、私も涙を流しそうになった。

一つ目の「宴会用の女」を読んで感じたことは、社会に出るとこんなことだらけなのか？ということだ。親戚の人たちやテレビから「社会に出ると大変」とか、「会社の環境が悪いと鬱状態になりかねない」と聞いたことがあるが、そういう話が高校生の私の耳に入るということは、もしかしたら今も昔も、社会や会社の環境というものは

は変わっていないのかもしれない。最近、何々ハラスメントとよく聞くが、実はその嫌がらせに名前を付けただけで、どこでもいじめや嫌がらせは減っていないのではないかと疑問に思った。きっと、今も昔も嫌がらせをする人は生まれながらにそのDNAを持ち、直そうとしないんだとも思った。私が社会に出るときはもっと環境が改善されたらよいと思うが、現実問題、きつと無理なので、自分は絶対、いじめる人間にはならないと思った。

二つ目の「結婚することになった」を読んで感じたことは、本当に結婚式で感動するのかわ？という疑問だ。私が小さい頃、親戚の結婚式に参加したことがあるが、結婚する夫婦、その両親、ましてやその叔父、叔母、友達までもが泣いていた。そして一番涙を流すであろう、新婦が両親に向けて手紙を読むとき、案の定、式場にいた全ての大人が泣いていた。まだ考え方が幼稚だった私は「なんでこんなにみんな泣いているんだ？悲しいことでもあったのか？」と疑問に思ったことを、今でも覚えている。しかも式が終わって帰るときになつたら、

みんな笑顔になっているのだ。私の頭の中はハテナマークでいっぱいになった。もちろん今はまだ結婚していないし、人生を捧げたいと思う人に出会ったことともないの

で、小さい頃の私の疑問は解消されていないが、考え方が少し大人になっただろう頭で今考えてみると、ヒントとなる糸口が見えてきた。それはきつと、今まで親に育ててもらったお礼、感謝の気持ちが涙として出てくるのではないかと、いうものだ。私も最近、将来のこと、一人暮らしのこと、子どもが欲しいなどと考えることが多くなり、親への感謝の気持ちが大きく、顔がぬれていることが多々ある。きつとこの現象と同じように、みんな結婚式で泣くのだろう。答え合わせは何年後になるかわからないが楽しみにしたい。そしてもう一つ疑問が浮上してきた。作者の父も、泣くと思っていたいなかったが、泣いた。では私の父は？ニヤニヤもしていないし、ヘラヘラもしていない。そして娘の私に涙を見せたことがない。普通の父親なら泣くのか？全くわからない。私の予想は「泣かない」だ。きつと私が父親に手紙を読んでも、微笑むだけ

けだろう。この件に関しても答え合わせが楽しみである。

私はこの本を読んで、今後、周りの人よりも多くの経験をしたいと思った。きつと作者さくらももこさんは人よりたくさんを経験し、様々なことを感じただろう。そうでなければあんなにたくさんエッセイ集、アニメ「ちびまる子ちゃん」もできていないだろう。もちろん、さくらももこさんのように有名な作家になろうとは思っていない。しかし、今の社会で必要なのは、適応力と自分の意志だと私は思っている。適応力は何事も経験しないと身につかない。自分の意志は様々なことに対して考えを持たなければ、鍛えられない。これから私たちを待ち構えている社会は、適応力がなく、意志が曖昧な者は除外されるだろう。社会に出て除外される前に、今のうちに様々な経験をし、自分を見つめていきたい。そして私は、何度転んでも、何度失敗しても立ち上がり、粘り強く生きていきたい。そうすればきつと、社会で認められ、求められる人になれるだろう。

